

# 薬師寺移転に関する一考察

上村顕太郎

薬師寺は、天武9年(678)に皇后鸕野讃良(後の持統天皇)の病氣平癒を祈願して、藤原京に造営された寺院に始まる<sup>(註1)</sup>。現在の奈良県橿原市城殿町にある「本薬師寺跡」がその創建時の遺構である。金堂の南面に東西二基の塔を建てるといふ、それまでの寺院にはなかった新しい伽藍配置が採用され、飛鳥寺や川原寺と並ぶ格式を持つ寺院とされた。和銅3年(710)に都が平城京に遷都すると、薬師寺も養老2年(718)に平城京に移転し<sup>(註2)</sup>、伽藍配置も良く似た形式で造営された。これが現在の薬師寺(以下、平城薬師寺とする)である。平城薬師寺には国宝の東塔や薬師三尊像など、優れた建築や彫刻が残されているが、これらの建築史的、美術史的位置づけを巡って生じた論争が、いわゆる「薬師寺移建・非移建論争」である<sup>(註3)</sup>。

明治時代に始まった薬師寺移建・非移建論争は、東塔や薬師三尊像が本薬師寺から平城薬師寺へと移されたものなのか、あるいは、平城京移転に合わせて新造されたものなのかをめぐって議論が続けられてきており、特に東塔に注目して、建築史の立場から論じられることが多かった<sup>(註4)</sup>。それは本薬師寺と平城薬師寺が同じ伽藍配置で造営されたこと、東塔の建築様式が、法隆寺の金堂や五重塔に代表される飛鳥様式よりも新しい様式であり、唐招提寺金堂をはじめとする天平様式よりも古様な要素が認められることが大きな問題であったからである。同時にこれらこそが、東塔の建築様式を白鳳様式とみなす理由とされてきた。

近年、平城薬師寺の復元に伴う調査と本薬師寺跡の調査により、建物の移築はほとんど否定されている。特に平成2年(1990)以降に行われた本薬師寺跡の発掘調査で創建時の瓦が出土したことが決定打となった。軒平瓦の文様は平城薬師寺のそれとよく似ているが、唐草文の形状が異なっていた。これは本薬師寺創建瓦を忠実に模倣することを意図して平城薬師寺創建瓦を製作したが、完全に模倣することが出来なかったことを意味している<sup>(註5)</sup>。さらに平成21年(2009)に始まった東塔の解体修理に伴い、木材の年輪年代測定及び放射性炭素年代測定による調査を実施したところ、初層天井の支輪板から729～730年前後に伐採した木材が見つかり、東塔の完成がこの時期に求められる可能性が高まっている<sup>(註6)</sup>。この年代は、天平2年(730)に東塔が完成したという『扶桑略記』の記述<sup>(註7)</sup>を裏付ける結果であり、薬師寺移建・非移建論争のうち東塔の移建についてはほぼ決着を見たと言えよう。

その上で筆者が注目したいのが、鈴木嘉吉氏による「薬師寺新移建論」である<sup>(註8)</sup>。鈴木氏は、本薬師寺西塔建設中に平城京移転が決定し、急遽本薬師寺西塔用の木材を平城京に運んで建設されたとしている。西塔移建説は既に石田茂作氏が主張していた説だった

が<sup>(註9)</sup>、鈴木氏の新移建論は本薬師寺西塔跡から出土した瓦と、平城薬師寺西塔の基壇外装に注目した所が特徴である。本薬師寺西塔跡周辺からは、平城京移転後の瓦が多く出土している。しかも平城薬師寺造営時に使われていた軒丸瓦より新しい瓦も含まれている。これらの点から、本薬師寺西塔は、平城薬師寺の造営より後に完成したと考えられる。一方の平城薬師寺西塔の基壇には、花崗岩製の地覆石と凝灰岩製の羽目石が用いられていた。これは山田寺や本薬師寺金堂に用いられた方式で、鈴木氏の言葉を借りれば「飛鳥・白鳳時代の大寺の最も重要な建物に用いた正統的手法」であった。これに対して金堂や講堂、回廊は地覆石も全て凝灰岩製であった。これは興福寺や東大寺など、奈良時代に主流となる手法である。つまり本薬師寺と同じ様式で基壇が造られたということは、西塔が移建された証拠と鈴木氏は主張している。

西塔は享禄元年(1575)に兵火で焼失したため、本薬師寺から移築されたか否かは分からない。その代わりに東塔基壇との比較によって、新移建論を検証することはできる。東塔の解体修理に合わせて基壇の発掘調査も実施され、当初の基壇の様子が判明している。その結果、規模や版築方法は西塔と共通していたが、版築前に地面を掘り下げる掘込地業が存在した点や心礎に舍利孔がなかった点、そして基壇の地覆石の石材などに相違が見られた。特に地覆石は、花崗岩が多く使われていたが、閃緑岩や安山岩など、複数の石種が確認され、階段は凝灰岩製だった<sup>(註10)</sup>。確かに地覆石も階段も全て花崗岩製だった西塔とは異なるものの、東塔においても西塔と同じ、つまり本薬師寺の手法を踏襲したことは認められる。つまり東塔のような新築であっても古い方式で基壇を作るのは可能であり、基壇外装をもって西塔移建を論じることはできないのである。また掘込地業は、現在平城薬師寺では東塔と東禅院跡<sup>(註11)</sup>に確認されるのみだが、古くは吉備池廃寺金堂跡や川原寺仏塔跡など、飛鳥時代の寺院で用いられているため、西塔よりむしろ東塔の方が古式に則っているのかもしれない。平城薬師寺の金堂や講堂の基壇が凝灰岩の切石積みで、掘込地業がなかったのは、薬師寺の移転をいち早く進めるために造営を急ぐ必要があったためと考えるべきだろう。

ただ、平城薬師寺の東塔基壇が飛鳥や藤原京の寺院と同じ手法を用いたという点は、建築様式のうえでも重要であろう。本薬師寺東塔の礎石の配置は、心礎の舍利孔と側柱礎石の地覆座の有無をのぞけば、平城薬師寺東塔とよく似ている。本薬師寺東塔では裳階用の礎石は現存しないが、出土した瓦から、平城薬師寺東塔と同様に裳階が付いていた可能性が指摘されている。東塔以外に金堂も本薬師寺と平城薬師寺でよく似た平面構造をしていた。また、平城薬師寺回廊は複廊だったが、当初は本薬師寺と同様の単廊にする計画だったことも発掘で分かっている。そして今回の基壇に関する知見を合わせれば、東塔が本薬師寺の建築様式を踏襲した可能性は高まったと言えよう。

次に、薬師三尊像についての検討を試みたい。これまで薬師三尊像が本薬師寺から移動したのか(以下、移坐説)、あるいは移転後新たに铸造されたのか(以下、新铸説)の両説を

めぐって論争が繰り広げられてきた。新鑄説では、天武14年(685)完成とされる興福寺仏頭よりも、表現と鑄造技術の両面で進歩していることが証拠として取り上げられてきた<sup>(註12)</sup>。

これに対して近年、文献史の立場から移坐を補強する説が提唱されている。それは長和4年(1015)に編纂された『薬師寺縁起』の金堂条である<sup>(註13)</sup>。ここには薬師三尊像について「已上持統天皇奉造請坐 已上流記文云、今畧抄之」とある。従来、特に新鑄説では「持統天皇」という漢風諡号が奈良時代後半まで使われないことに注目して、金堂条を『薬師寺縁起』編纂時の創作とする見方が強かった。これに異議を唱えたのが内藤栄氏である。内藤氏は「奉造請坐」という記述が、天平19年(747)に書かれた『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』など、奈良時代の資財帳に見られるのに対して、平安時代以降に成立した文献には見られないことを突き止め、奈良時代の資財帳を参考にした可能性が高いと主張している<sup>(註14)</sup>。これまでとは異なる部分に着目した点でも興味深い指摘であろう。

もうひとつ、「今畧抄之」という部分にも注目したい。東野治之氏は、金堂条はもともと長文で、縁起文としての体裁に合わせるために省略したと考えている<sup>(註15)</sup>。確かに「無数」や「不可称計」など、他の文献で正確な個数が示されていないながら金堂条で示されていない部分がある所から、省略されたことがうかがえる。しかし『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』や『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』を見ると、「堂●口 一口金堂…」という体裁で、堂宇や仏像ごとにグループ分けされて書かれている。実際に『薬師寺縁起』にある資財帳の別の引用にも、「門七口、仏門二口(以下略)」とある。これに対して金堂条を含む『薬師寺縁起』では、各堂に何の仏像が祀られているかという体裁になっている。ところが金堂条には、須弥壇のつくり、天蓋の装飾、光背の様相について記されているのに対して、講堂条や食堂条など、仏像が祀られた他の堂に関する文には同様の記述は見えない。もしも金堂条を、他の記述と同様長和4年の成立とするならば、全体の体裁に従って、須弥壇や光背に関する記述は必要ないはずである。しかも宝亀11年(787)に書かれた『西大寺資財流記帳』には、光背や仏具について詳細に記してあることを考えれば、金堂条における須弥壇や光背の記述も、資財帳を参考に書いたと考えるべきであろう。

ゆえに金堂条は、奈良時代の資財帳から金堂に関係のある事項を抜き出し、できる限り縁起文としての体裁に合わせて書かれたと、筆者は考えている。それが「畧抄」の意味することであり、典拠が古いとすれば、金堂条は移坐説にとって十分な証拠と言えよう。

次に問題となることは、薬師三尊像が持統朝のいつ造られたかということである。これまで製作時期を巡って、『日本書紀』の記述から、無遮大会が開催された持統2年(688)説<sup>(註16)</sup>と、仏像製作及び開眼会が行われた持統11年(697)説<sup>(註17)</sup>に分かれて論じられてきた。持統2年説を選択した場合、興福寺仏頭との表現、技法的な差異を説明することが難しくなる。このため持統2年説は新鑄説の一環として主張されることが多いが、無遮大会は『日本書紀』では宮中で行われた記録が多いため、その仏教行事だけで本尊の存在を想定する必要はないと、筆者は考える。

持統11年説では、施主が天皇ではなく「公卿百寮」と書かれていること、そして仏像製作開始から開眼会まで一か月程度しかかかっていないことなどが問題となっている。しかし仏像製作が天皇の病氣平癒のために行われたとありながら、その前後に持統天皇が病氣になった記録はなく、むしろ朱鳥元年(686)の川原寺での祈祷の延長線上で行われた可能性も考えられる<sup>(註18)</sup>。ただし筆者は、わざわざ14年も前の出来事を引き合いに出さずとも、仏像製作の記録には祀る場所について記載がないことと、開眼会の記録にはっきりと薬師寺で催されたとあることから、本尊は遅くとも持統11年には完成しており、同年に製作を開始した仏像とは別物だったのではないかと考えている。加えて翌年の文武2年(697)に薬師寺造営が終了したという『続日本紀』の記述<sup>(註19)</sup>を考慮するならば、本尊の完成をうけて本格的に寺院として機能したことを造営終了の記事が意味していたのだろう。

以上、平城薬師寺の東塔は天平2年の新築でありながら本薬師寺の様式を踏襲して建てられた建築であること、薬師三尊像は遅くとも持統11年までに本薬師寺の本尊として完成し、薬師寺の移転にもなって平城薬師寺へと移された可能性が高いことを述べてきた。しかし、薬師寺をめぐる論争については、解決すべき問題も依然として多い。

まず東塔については、裳階の存在が大きな問題と言える。宮上茂隆氏は、主屋の柱に内転びがあるか否かで、裳階の構造が決まっていた可能性を指摘している<sup>(註20)</sup>。実際、東塔には内転びがあった痕跡と思われる部分が観察されているが、解体を伴わない調査での報告なので、決定的とは言えない。そのため内転びと裳階の関係は、今回の解体修理に判断が委ねられる。また、同じく宮上氏が指摘していることだが、塔内にあったという釈迦八相を表した塑像群と裳階の関係も注目すべきである<sup>(註21)</sup>。平城薬師寺の東西両塔に釈迦八相を表した塑像群が祀られていたとする『薬師寺縁起』の記録は、発掘調査によって、塑像の残欠が大量に出土したことから裏付けられている。これに対して本薬師寺跡では、昭和初期に見つかったとされる塑像頭部を除けば、塑像群につながる遺物は見つかっていない。

さらに東塔については、心礎の石材についても問題視すべきであろう。東塔心礎は花崗岩製であるのに対して、他の礎石は石英閃緑岩という別の石材で作られていた。西塔心礎も石英閃緑岩でできていることを考えると、当初は東塔においても石英閃緑岩製の心礎を据え付ける予定だったが、据え付ける直前に変更された可能性がある。しかしこれを証明するには、造営過程についてより細かく検討しなければならず、物的証拠もないため、仮説の域を出ない。

本尊については、もし本薬師寺から平城薬師寺に移坐されたのならば、その後の本薬師寺には何が祀られたかが問題だろう。新鑄説では考慮されない問題であり、本薬師寺西塔が平城京移転後に完成したとすれば、注意が必要だろう。これについて東野治之氏は、本薬師寺の機能は平城薬師寺に吸収されたため、本尊は必要なかったと見なしている<sup>(註22)</sup>本

薬師寺独自の活動が記録に見えないという東野氏の指摘は重要であるが、平城移転後の本薬師寺の実態については、なお慎重な検討が必要と思われる。

こうしたさまざまな問題をひとつひとつ丹念に考察していくことが、薬師寺の移転をめぐる問題の総合的な解明につながることを期待するところである。

## 【註】

1. 『日本書紀』天武9年11月癸未条「皇后体不豫、則為皇后誓願之、発興薬師寺」（『新編日本古典文学全集 4 日本書紀③』小学館、1998年、402頁。以下『日本書紀』は同書に拠る）。なお、薬師寺の歴史については、太田博太郎「薬師寺の歴史」（『奈良六大寺大観』第6巻「薬師寺 全」、岩波書店、1970年。同・補訂版、2000年）を主に参照した。
2. 薬師寺本『薬師寺縁起』「養老二年〈戊午〉、移伽藍於平城京」（藤田経世『校刊美術史料 寺院篇』中、中央公論美術出版、1975年、134頁。以下『薬師寺縁起』は同書に拠る）。
3. 薬師寺移建・非移建論争については、大橋一章・松原智美編著『薬師寺千三百年の精華 美術史の歩み』（里文出版、2000年）を主に参照した。
4. 建築史の立場から、東塔を中心に移建・非移建の問題を論じた代表的な研究には、関野貞「薬師寺東塔考」（『国華』155・158号、1904年。関野貞・太田博太郎『日本の建築と芸術 下』再録、岩波書店、1996年）、足立康「薬師寺東塔建立年代考」（『国華』438・485・487・491号、1931年。『古代建築の研究 上』再録、中央公論美術出版、1986年）、福山敏男「薬師寺の歴史と研究」（福山敏男・久野健『薬師寺』東京大学出版会、1958年。『福山敏男著作集1 寺院建築の研究 上』再録、中央公論美術出版、1982年）などがある。このうち関野氏、福山氏は移建説、足立氏は非移建説を主張している。
5. 花谷浩「本薬師寺の発掘」（『佛教藝術』235号、1997年）。
6. 「薬師寺東塔、平城京で新築 移築説と論争、年輪測定決め手」（『朝日新聞』2016年12月20日付）及び「国宝薬師寺東塔木部材の年代測定 建立年代について」（『奈良文化財研究所紀要』2017、2017年）。
7. 『扶桑略記』天平2年3月9日条「始建薬師寺東塔」（『新訂増補 国史大系12 扶桑略記 帝王編 年記』吉川弘文館、1965年、89頁）。
8. 鈴木嘉吉「薬師寺新移建論—西塔は移建だった—」（白鳳文化研究会編『薬師寺白鳳伽藍の謎を解く』収録、富山房インターナショナル、2008年）。
9. 石田茂作「出土古瓦より見た薬師寺伽藍の造営」（『伽藍論攷：仏教考古学の研究第1』養徳社、1948年）。
10. 奈良文化財研究所・橿原考古学研究所編『薬師寺東塔基壇 国宝薬師寺東塔保存修理事業に伴う発掘調査概報』（薬師寺、2016年）。
11. 箱崎和久・今井晃樹、森川実「薬師寺境内の調査—第457次—」（『奈良文化財研究所紀要』2010、2010年）
12. 薬師三尊像の移坐・新鑄説をめぐる問題については、松山鉄夫『日本古代金銅仏の研究 薬師寺編』（中央公論美術出版、1990年）を主に参照した。
13. 「一、金堂一字、二重二閣、五間四面、長八丈七尺五寸、或七丈八尺広四丈、或五丈一尺五寸、或四丈五尺柱高一丈九尺五寸、仏壇長三丈三尺、広一丈六寸、高一尺八寸、以馬腦為鬘石、以瑠璃為地敷之、以黄金為繩堺道、以蘇芳造高欄、以紫檀為内殿天井障子、以鉄繩鈞天蓋、宝四端交立白輝宝珠及半月等、不可称計、其堂中安置丈六金堂須弥座薬師像一軀、円光中半出七仏薬師仏像、火炎間翹造無数飛天也、左右脇侍日光遍月光遍并卍像各一軀、已上持統天皇奉造請坐者／已上流記文云、今畧抄之」。

14. 内藤栄「薬師寺縁起金堂条における流記引用について」(『鹿園雑集』15・16 合併号、2015年)及び同「『薬師寺縁起』金堂条にみる薬師三尊像について」(奈良国立博物館編『開館120年記念特別展 白鳳 花開く仏教美術』収録、2015年)。
15. 東野治之「文献史料から見た薬師寺」(前掲註7『薬師寺白鳳伽藍の謎を解く』収録)。
16. 『日本書紀』持統2年正月丁卯条「設無遮大会於薬師寺」。
17. 『日本書紀』持統11年6月辛卯条「公卿百寮始造為天皇病所願仏像」、同年7月癸亥条「設開仏眼会於薬師寺」。
18. 東野治之「天皇号の成立について」(『正倉院文書と木簡の研究』収録、塙書房、1977年)及び前掲註15 東野氏論文。
19. 『続日本紀』文武2年10月庚寅条「以薬師寺構作略了、詔衆僧令住其寺」(『新日本古典文学大系 12 続日本紀 1』岩波書店、1989年、12頁)。
20. 宮上茂隆「本薬師寺宝塔の形態と平城京移建」(『日本建築学会論文報告集』226号、1974年。『薬師寺伽藍の研究』再録、草思社、2009年)。
21. 前掲註20 宮上氏論文。
22. 前掲註15 東野氏論文。

(付記)

本稿は、2016年度に提出した修士論文の作成の過程で考察した内容の一部をまとめたものである。修士論文及び本稿の作成にあたっては、浅井和春先生のご指導を賜りました。また、先生の退任にあたり、本稿の発表の機会をいただきましたことを、厚く御礼申し上げます。

(2016年度本学大学院博士前期課程修了)